

転生しました、  
脳筋聖女です2

## カールハイツ

攻略対象の一人で  
最高峰の魔術師。  
何故かアンジェラに  
疑惑の目を向けている。



## ジュード

攻略対象の一人で  
曲剣の使い手。  
幼い頃からアンジェラの  
護衛を務めている。

## アンジェラ

アクション系乙女ゲームの主人公に  
転生した、元廃人プレイヤー。  
物理攻撃の苦手な聖女タイプだが  
魔法で身体能力を強化し  
特大メイスをふり回して戦う。

## 登場人物紹介

Characters Introduction

## ディアナ

乙女ゲームの  
もう一人の主人公。  
女騎士タイプだが  
ゲームより遥かに長身に  
筋骨隆々としている。

## ウィリアム

攻略対象の一人で  
天才魔術師。



## エルドレッド

攻略対象の一人で  
戦う王子様。



## ノア

攻略対象の一人で  
エルフの賢者。



## ダレン

攻略対象の一人で  
諜報系の近衛騎士。



## 目次

番外編	EX STAGE	DARREN	281
STAGE 11	脳筋聖女と世界の敵	236	
STAGE 10	脳筋と聖女と謎	203	
STAGE 9	脳筋聖女と墓 <sup>はか</sup> 守 <sup>も</sup> りの村	118	
STAGE 8	脳筋聖女の一時の休息	73	
STAGE 7	脳筋聖女と謎の少年導師	8	
転生しました、脳筋聖女です2		7	

転生しました、  
脳筋聖女です2

「……あ、アンジェラ。起きた？」

カタカタと規則正しく聞こえてくる車輪の音に目を開けば、そこに広がるのは眩いばかりに輝く世界——いや、世界は大げさか。深紅のビロード張りの部屋の中、輝いているのはそこに人間だ。金と銀とすぐ隣に黒のイケメン天国。なんだろう、この目覚めに優しくない光景は。

(こんなの、まるで乙女ゲームみたい……………ああ、そうか)

そこまで考えて、ようやく意識がハッキリしてくる。そうだ、ここは正しく乙女ゲームの世界だ。——そういう世界に転生したのだったわ。

「ごめん、今起きたわ」

「うん、おはよう。アンジェラ」

起こしてくれた黒のイケメンに声をかければ、彼の整った顔がふにやりと笑みに変わった。

私の名前はアンジェラ・ローズヴェルト。亜麻色の髪にサファイアのような青い目を持つそれなりの美少女なのだけど……実は前世、日本人で乙女ゲームだった記憶がある。転生者だ。

それも、今生きているこの世界の元となった『アクション系乙女ゲーム』を遊び尽くした廃人級のプレイヤーであり、情報チート持ちでもある。

戦闘要素が売りというこの異色のゲームの目的は、『魔物』と呼ばれる異形の化け物の大量発生によって危機を迎えた世界を、『攻略対象』たちと共に救うことだ。

それはゲームが現実になった今も同様で、私はこのウィッシュボーン王国の王子様が新設した魔物討伐部隊に招集されて、戦いの日々を送っている。……本来ならば皆を回復魔法でサポートするはずの、後方支援型の主人公に転生したにもかかわらず、強化魔法を自分に使って最前線で戦いながら、ね！

相棒は鋼鉄製のメイス、座右の銘は『困ったらとりあえず殴れ』だ。おかげで、ゲームの時とは少し展開が違うものの、今日までは概ね順調に救世活動が進んでいる……はずだ。多分。

(どこかと思ったら、ここは馬車の中だったのね)

中身こそ別人になってしまったものの、ゲームのシナリオ通りに部隊に加わった私は、攻略対象たちと共に王都の外れへ魔物討伐に向いていた。この馬車は、部長である王子様が移動用に手配してくれたものだ。

ただ、戦いたい私は馬車には乗らず、護衛として馬で随行していたはずなだけだ。

「アンジェラ、ぼんやりしてるけど大丈夫？ どこか痛い？」

状況を確認していれば、すぐ隣にいる黒のイケメンが私の顔を心配そうに覗き込んできた。

黒髪に黒目、この国では珍しい褐色の肌を持つ彼の名前はジュード。私の十年来の幼馴染にして、

ゲームでは攻略対象だった男だ。

剣士の彼も、行きは馬車ではなく馬で来ていた。というか、私は彼の馬に相乗りさせてもらっていたのだけど、何故二人とも馬車に乗っているのかしら。

「いや、どうして私たちが馬車に乗ってるのかな、とと思って」

「ああ、覚えていないんだね」

「お前は戦いの後に、その黒いの腕の中で眠ったんだ」

私の疑問に答えてくれたのは、向かい側に座っている金と銀のイケメンたちだった。

金髪金眼の柔らかい印象の男性が、この部隊の隊長にして私たちの住むウィッシュボーン王国の第三王子でもあるエルドレッド殿下。銀髪銀眼の恐ろしく美しい人が、『月の賢者』と呼ばれるエルフの魔術師ノアだ。二人ともゲームの時は攻略対象であり、今は討伐部隊の仲間である。

（私が眠ってしまったって何かしら？ そんな記憶はないけど）

——ここで目覚める前の記憶を辿ってみる。今日の討伐は、部隊のメンバーの実力を確かめるための『お試し出撃』だった。だから、ちよつと戦ってすぐ戻るはずだったのだけど。

（そこで、強敵とされる蜘蛛の魔物【ヤツカハギ】の群れが出て……さらにその後、ボス魔物の【アラクネ】に遭遇したんだっわー！）

まさか王都近くでボスに遭遇するとは思わず、大変な苦戦を強いられることになった。

幸い、ゲームの時よりも強くなっていた仲間たちと協力して、魔物を倒すことはできたのだけど。でも、それで何故、私は眠ってしまったのだろう。

「……眠った覚えがないのなら、単に疲労と魔力の使いすぎによる“寝落ち”だぞ」

「あ、なるほど」

呆れたようなノアの補足で、ようやく現状が理解できた。なるほど、眠った覚えがないと思えば、単に疲れて寝落ちしただけだったのか。元々私は自分に強化魔法を使い続けているし、いきなりのボス戦だったものね。仲間がいてくれてよかったわ。

「寝落ちか……気をつけないと。運んでくれてありがとね、ジュード」

「僕は魔法も魔術もサッパリだからね。無駄に育った体が、君の役に立つてよかったよ」

今もなお体を支えてくれている幼馴染に礼を言えば、彼はまた嬉しそうに微笑んでくれる。顔立ちは鋭い系のイケメンなのだけど、私に向ける笑みはいつだってとても優しい。

思わずほんわかと和んでいれば、ふと御者席に繋がる窓からノックの音が聞こえてきた。

「中の方々、そろそろ着きますよ。降りる準備して下さい」

聞き慣れた声は、やはりゲームでは攻略対象だった男性のものだ。やがて、彼の言葉を証明するようにガヤガヤと周囲がにぎやかになってくる。

「降りようか。アンジェラは立てる？」

「しっかりと寝かせてもらったみたいだし、大丈夫よ」

外の人たちの言葉が聞き取れるぐらいになった頃、雄々しい馬の嘶きと共に馬車はゆっくりと停止した。次いで、丁寧な動きで扉が開かれていく。

「お帰りなさいませ、エルドレッドでん……ぎゃあああッ!? 殿下が!! 皆様が!!」

「……うん？」

恭しく扉を開けてくれたのは、ジュードが借りている藍色の騎士服と同じ格好をした人々だったのだけ。彼らは私たちの姿を見た途端に、野太い悲鳴を上げて後ずさった。

そのまま、「担架を」とか「医者を」とか慌ただしく叫んでいる。一体何かと、四人で顔を見合わせてみれば……原因はすぐにわかった。

「私たちの服、結構すごい汚れ方してるわね」

「特にノアは、元が白い服だから血が目立つねえ。あはははは」

「お前も大概だぞ、エルドレッド。お高そうな服が台無しだからな」

そう、予期せぬボス魔物【アラクネ】との戦闘の結果、私たちは決して浅くはない怪我を負わされてしまったのだ。

怪我自体は私の回復魔法で全部治したけど、服に染み込んでしまった血はもちろんそのままだし、砂やら泥やらでめちゃくちゃに汚れている。騎士たちが驚くのも当然だわ。

「しかも今日は、かるーく実力確かめに行ってますって体で出かけたものね」

「それが帰ってきたらこの様では……殿下、僕たちの部隊が解散させられる可能性もあるのでは」

「さすがにそれはないだろうし、私たちがでなければあの蜘蛛の魔物は倒せなかつただろう。被害を最小限に抑えられたのだから、むしろ賞賛されると思うよ。……ただ、今は彼らを落ち着かせて、話をしてこないと面倒かもねえ」

美しい顔に苦笑を浮かべた王子様は、一人でささつと馬車を降りると、慌てている騎士たちをど

こかへ連れていってしまった。彼を補佐するように、ノアも汚れた外套を翻して去っていく。

馬車に残された私とジュードは、ぼかんとしながら彼らを見送るばかりだ。

「……とりあえず、僕たちも馬車を降りようか。ここにいても仕方ないし、アンジェラはお風呂に入りたいんだよね？ あと、ご飯も」

「え、なんで知ってるの!？」

「寝ぼけた君が言ってたからね。さ、行こうか」

さりげなくエスコートしようと手を差し出してきたジュードに、渋々ながら従っていく。この部隊の初陣でもあった大変な一日は、なんだか締まらない形で終わりそうだ。

結局あれから王子様とノアが戻ってくることはなく、騎士団からお城の人たちに引き渡された私は、一通り怪我の確認をされた後に、お風呂に入る時間をたっぷりもらうことができた。

着替えを終えてホクホクしながら指定された部屋へ向かえば、これまたテーブルには山盛りのご馳走！ 隊長が本物の王子様っていうのは、こういう待遇が素晴らしいわね！

「お、いらっしやいアンジェラちゃん。ご機嫌だな」

私がうつとりとテーブルを眺めていれば、先に集まっていた仲間たちがにこしながら声をかけてくれる。

灰緑色の髪に猫のような緑眼をしたちよつと軽そうな彼は、王子様の近衛騎士を務めるダレン。

彼のすぐ近くで真っ黒なローブを引きずっているのが、魔術師のウィリアム。こちらの二人もゲ

ムの攻略対象であり、今は共に戦う仲間だ。

雰囲気の真逆な二人に色っぽい系美形のジュードが加わり、三者三様の魅力を醸し出している。「大きいお風呂でゆっくりさせてもらいましたからね！ 本格的な旅に出るまでは、お城の素晴らしい設備を堪能させてもらいますよ」

「考え方がたくましくていいね。さて皆そろったし、姐さんも一緒にご飯食べましょう」  
どうやらメンバーの中で、私が一番最後だったようだ。約束の時間に遅れてはいないはずだけど、一応皆に軽く頭を下げておく。「気にしないで」とそれぞれ席へ移動していく中、壁際で警護するように立っていた深い青色の鎧もズシンと動き出した。

「ディアナ様！」

途端に私の胸をさらなる歓喜が埋め尽くし、その重たい足音のほうへと顔を向ける。帰ってからお会いできていなかったのだけど、こちらにいらっしやったのか！

「アンジェラ殿、元氣そうで何よりだ。今日の戦い、実に見事であったぞ」

地面に響くほど低い声での労いに、ぽつと頬が熱くなる。二メートルをゆうに超える長身に、鎧の上からでもわかる筋骨隆々の素晴らしい体。

どの男よりも雄々しい“彼女”は、私の筋肉の女神様ことディアナ様。私が転生したアンジェラと共に『乙女ゲームの主人公』だった真正正銘の女性である。ゲームと同じなのは、赤髪緑眼ということだけだどね。

そんな彼女は、前線で戦いたい私が心から憧れる人でもある。

「ディアナ様こそ、今日は本当にありがとうございました。貴女様がいなければ、あの巨大な蜘蛛の魔物は決して倒せなかったでしょう」

「我は大したことはしておらぬさ。皆の命を繋いだのは、他ならぬそなただ。礼を言わせてくれ」

山賊も裸足で逃げ出すような迫力のあるお姿だというのに、彼女の中身は正しく高潔な騎士！前線で戦いたい私がサポート型のアンジェラに転生したのは不本意だったけど、このディアナ様と出会うためだったというのなら、私の転生先も大正解だと思えるわ。

「おお、そうだ。そなたのメイスは騎士団に預けておいたゆえ、手隙の際に受け取ってくれ」

「そうだ、私の相棒！ 重ね重ねすみません!!」

私としたことが、うつかりしていた。私が寝落ちしてジュードに運ばれたのだから、武器は当然他の人が運んでくれたのだろう。今の今まで忘れていたとは、なんたる不覚！

「……あのメイス、オレたちの中じゃディアナ姐さんしか持てなかったんだよな。よくあんな重たいものをふり回せるよな、アンジェラちゃん」

ディアナ様に平謝りする私の耳に、ダレンの呆れたような声が聞こえる。私のメイスは本来なら木で作る部分まで全て鋼鉄で固めた特注品だ。

自分に強化魔法を使い続けられる私だからこそその武器なので、普通の人間では持ち上げることができないだろう。

私を凌ぐ力持ちのディアナ様がいて下さって本当によかった。危うく戦場へ取りに戻るところだったわ。



「今日のそなたの働きから考えれば、倒れるのも仕方ないことだ。さあ、食事にしようアンジェラ殿」

私がおぼんと胸を撫で下ろしたところで全員が席につき、ようやくとばかりに食事が始まった。「んん、美味しい！生きて帰ってこられてよかった！」

早速料理に手をつければ、どれもこれも喰<sup>く</sup>るほどに美味しい。教会で質素な暮らしをしてきた私には名前も材料もわからない料理ばかりだけど、そんなのは些細<sup>ささい</sup>なことだ。

食べる前はテーブルマナーに気をつけようとか考えてもいたけど、食べ始めてしまえばそんなものすっかり忘れてしまった。今日は特に、予想外のボス魔物と必死で戦ってきたからね。

それは皆も同じようで、それぞれ幸せそうな表情で舌鼓<sup>したつみ</sup>を打っている。ウィリアムなど、普段は隠したがっている赤い目がフードの下から見えているのに、全く気付いていない。よほど集中して食事を楽しんでいるのだろう。

「一時はもうダメかと思っただけど、皆無事でよかったね」

「本当よ。ジュードは特に沢山怪我をしたんだから、今日はしっかり休むのよ？」

「無茶ばかりした君に言われたくないよ。でも睡眠はしっかり取りたいから、明日の予定は聞いておきたいね。隊長のエルドレッド殿下はいないけど、ダレンさんは何か聞いていますか？」

ゆっくりなように見えて、私の倍以上食べているジュードがダレンを見れば、彼はもくもくと口を動かしながら首を横にふっている。どうやら、今後の予定はまだ決まっていならしい。

……まあ、初回のお試し戦闘でボスに当たってしまったのだから、スケジュール調整が入ってい

たとしてもやむなしか。

「ごくん……ふう。殿下からは何も聞いてないけど、ウィル君のほうでオレたちに用があるっていう伝言だけは受け取ってるよ。そうだよな？」

「むぐ……は、はい！ぼくといいですか、ぼくのお師匠様なのですけど」

「ウィリアムさんの師匠？」

咀嚼<sup>そじぐ</sup>しながらなんとか喋<sup>しゃべ</sup>った彼に、食事の手が止まってしまふ。ウィリアムの師匠といえば、ゲームでは攻略対象だった人物だ。しかしゲームと違い、彼は部隊に参加しなかった。

——それはこの世界がゲームではなく、現実である”という証明でもある。

(ゲームと現実で立場が変わったキャラか)

外見が大幅にグレードアップしたディアナ様だって部隊に参加してくれたのに、まだ登場すらしていない彼はどれほど変わっているのだろう。うん、とても興味深い。

「その方は、なんて？」

「は、はい。皆さんの都合がつく時に、会って話ができないかと。ぼくに届いた手紙には、それしか書かれてなくて、詳しいことは何も……す、すみません！」

「ああ、謝らなくても大丈夫よ。教えてくれてありがとう」

ウィリアムがオロオロして謝り癖を發揮しそうになったので、すかさず止めておく。情報が少なすぎてなんとも言えないけど、ゲームの攻略対象なら会っておきたいわよね。

「我も何も言付<sup>ことづ</sup>かつてはおらぬし、恐らく明日の出陣はないだろうな」

「姫さんも聞いてないですか。じゃあ、明日はそのお誘いに応じる方向でいいんじゃないか？ 確かそのお師匠さんって、討伐部隊への参加を断った人だろう？ オレも付き合うよ」

ディアナ様とダレンも命令がなければ応じる、という方針のようだ。私も会ってみたいと首肯して返せば、ウィリアムは恥ずかしそうに身を縮こまらせた。

「ジュードは……聞くまでもないか」

「もちろん。アンジェラが行くのなら、ついていくよ」

「じゃあ、明日はそのお師匠様のところへお邪魔させていただきましようか。ウィリアムさん、今から返信しても間に合う？」

「はいっ！ 魔術で返事ができますので、すぐに!!」

魔術って便利でいいわね。私の使う魔法は、便利そうに見えて制限が多いからなあ。

まあとにかく、明日は戦いではなく、まだ見ぬ攻略対象に会いに行くこと決定してみたんだ。色々と不安もあるけど、今日はひとまず疲れを癒して、明日に備えておきましようかね。

\* \* \*

「すまないけれど、私は公務があるから、今回は遠慮しておくよ」

「俺も城の魔術師たちから、魔術書の翻訳を頼まれている。旅立つ前に片付けておきたいんだ。悪くな」

「非常に残念だが、我も同行できなくなってしまった。ウィリアム殿の師が住まう場所は、この体には少々狭くてな……ゆっくり歓談してくると良い！」

ということ、ぐっすり休んだ翌朝。ウィリアムの師匠からのお誘いには、私とジュード、ダレン、ウィリアムの四人で行くことになった。

任務外ということで、騎士団の制服を着ていたジュードとダレンは堅いデザインの上着を脱ぎ、シャツ一枚のラフな服装に。ウィリアムも全身をすっぽり覆うローブから、ケープぐらいの短いものに変わっている。顔をフードで隠すのは変わらないみたいだけど。

私はいつも通りの修道服で、相棒のメイスを留守番させてきた。戦いに行く以外でアレを背負っている、たまに職質されるからね。

「ディアナ様が狭いって言ってたけど、貴方のお師匠様はどこに住んでいるの？」

「は、はい！ お師匠様は今、王都の国立図書館で名誉館長を務めています。建物の上階に私室をいただいでいて、そこで暮らしているらしいです」

なるほど、図書館か。建物自体は大きくても、通路が狭いパターンね。狭いと聞いて四人で押しかけても大丈夫なのか心配だったけど、普通の人間のサイズのサイズなら問題なさそうだな。

「王都内に住んでいるのに、なんでお師匠さんは部隊に参加してくれなかったんだらうな？ 他に大きな仕事を請け負っているわけでもなさそうだったし、ウィル君は詳しい話を聞いているかい？」

「それが、よくわからないんです。この戦いに思うところがある、としか教えて下さらなくて。……うう、すみません。ぼくがもっと、お師匠様にちゃんと意見できるような人間なら……」

「ああ、落ち込む落ち込むな！ ウイル君が参加してくれただけで充分だからさ！」

ローブが短くなってもやっぱりじめじめしているウイリアムに、慌ててダレンがフォローを入れる。それにしても「思うところがある」か……なかなか興味深い意見だわ。

「アンジェラはそのお師匠様について、神様から何か聞いている？ 行っても危険はないのかな？」  
おたおたしている男二人を尻目に、ジュードがこちらへ近付き耳打ちしてくる。私の天啓（仮）もすっかり信じてもらえるようになったわね。本当はゲームの知識なんだけど。

まあ、別に隠す必要もないので答えよう。

「そうね……確か、この国には数えるほどしかない『導師』の一人よ」

ゲームの攻略対象だった彼は、『導師』と呼ばれる最高峰の魔術師だ。ノアの肩書きである『賢者』が知恵を説くことに優れた魔術師なら、『導師』は先生みたいな後継者育成に優れた魔術師である。……だけど、彼が弟子をとることは本当に珍しいらしい。

彼が選り好みしているというわけではなく、属性が偏っているから合う人材が少ないのだ。ウイリアムは「彼に選ばれた」という時点で、魔術師協会から高く評価されていることだろう。

「魔術師というより、呪術師みたいな人だね。壊したり滅ぼしたりすることの達人らしいわ」

「それはまた、なんだか物騒な人だね」

歩く殺戮兵器のジュードは人のことを言えないと思うけど、彼が物騒なのは同意するわ。

導師は攻撃特化のウイリアムよりも凶悪な、殲滅系魔術の使い手だからね。消費魔力が大きいからゲームでは連発できなかったけど、えげつない手段のオンパレードだった。私とは正に真逆の属性だ。

性だ。

「すごいです、アンジェラさんは本当によくご存じですね！」

「むしろ、神様ってアンジェラちゃんを優遇しすぎじゃないか？ そりゃ絶世の美少女に頼まれたら応えたくはなるだろうけどさ」

「私が頼んでいるわけではないのですが、ご気分を害してしまったならごめんなさい」

いつの間にか私たちの話に加わった二人の反応に、つい苦笑してしまう。情報源はゲームだから神様のひいきではないんだけど、他の人からしたらチートには変わりないものね。

諜報系の仕事をしているダレンは特に情報を得ることの難しさを知っているだろうから、今後は少し気をつけようか。

「えっと……あ、ここです、着きましたよ」

「あれ、もう？」

なんやかんや話しているうちに、私たちの目の前には煉瓦造りの大きな施設があった。まだ十数分しか歩いていないのだけど、目的地は意外とご近所だったらしい。

縦よりも横に広いやや古い建物は、大きな学校の体育館のような印象だ。私たち以外にも沢山の人が出入りしており、特にコスプレ風のローブ姿の人が多くて、つい目で追ってしまふ。

「ぼくは受付の方に話をします。少し待っていて下さいね」

田舎者丸出しな私が目を輝かせている間に、ウイリアムは慣れた足取りで建物の中へ入ってしまった。弱気で面倒な子だと思っていたけど、同じ十六歳として見れば結構しっかりした青年なの

かもしれない。妙な謝り癖さえなければモテるだろうに。

「二人は図書館とかあまり来ないかい？」

「僕も本は読みますが、わざわざ出向くほど興味はないですね。アンジェラは読書家だよね」

「魔法書ばかりだけどね。教会にも図書室はあったけど、ここまで規模の大きいものは見たことないから、正直ちよつとウキウキしてるわ。……田舎者でごめん」

気持ちを正直に伝えれば、二人は柔らかく笑ってくれる。今日は用事があったて来たのだけれど、もし時間があるのなら、少しだけでも覗いてみたいものだ。読んだことのない魔法書もあるかもしれないし。

（そういえば、昔は重い魔法書で筋トレしていたわね。懐かしい話だわ）

幼い頃は分厚い魔法書を持つことすらできず、それで強化魔法を身につけたのよね。

あの頃と比べれば、私は確実に成長している。今なら強化魔法なしでも魔法書を持てるかもしれないわね。十冊は無理にしても、五冊ぐらいなら！

「アンジェラさん？ 腕まくりなんてして、どうかしましたか？ 華奢できれいな腕ですわ」

「ウィリアムさん、普通の女の子にとつての褒め言葉で傷を負う人間もいるってことを、覚えておいてくれると嬉しいわ」

「ええっ!? な、なんかすみません!!」

勢い込んで袖をまくってみたら、戻ってきたウィリアムが会心の一撃を入れてくれた。

……ディアナ様のような鋼の肉体への道のりは、まだまだ果てしなく遠いようだわ。

とりあえず、彼の師匠に会うアポは取れたようなので、外付けの階段で上階へ向かっていく。

「えーと、この階の端の部屋……あ、あの部屋ですわね」

上階は建物の広さの割に、ずいぶん扉の数が少ない造りだった。それぞれが一部屋だとしたら、彼の師匠はかなりの広さを割り当てられていることになる。

ウィリアムが示したのは、中でも特に広そうな部屋で、思わず皆そろって喉を鳴らしてしまった。城のものにも劣らない両開きの大きな黒い扉。けれど……デザインがかなり独特な感じだ。

「この扉の彫刻って、多分悪魔よね？ 貴方のお師匠様は、悪魔や邪神を崇拜していたりする？ 私は神聖教会預かりという身分だから、立場上敵対しちゃうのだけだ」

「そ、そういう信仰はなかったと思います！ 多分……。すみません、ぼくもここに来たのは初めてなんです。前は違うところに住んでいらしたので」

恐る恐る質問してみれば、ウィリアムは自信がなさそうに答える。扉の材質はただの木のようなけれど、悪魔の顔だけじゃなく、古代文字まで刻まれている。下手に触ったら呪われそうだ。

「お、お師匠様、いらつしやいます？ ウィリアムです」

「いらつしやーい！ 鍵は開いてるよー」

ウィリアムがそつと声をかけてみれば、中から返ってきたのは意外にも明るい声だった。扉のホラー加減とは合わない反応に、四人で顔を見合わせる。

「あ、開けますよ？ 触っても呪わないで下さいねー」

代表してウィリアムが手を触れれば、見た目よりも軽い動きで扉が開かれた。

そして視界に広がるのは——本の洪水。天井ぎりぎりまで本が詰められた棚と、床にも机の上にも高く積まれた本の山。本、本、本。見渡す限り本だらけだ。

「な、何この部屋……本当に人が住んでいるの？ 倉庫とかじゃなくて？」

「おーい、こっちだよー」

生活感どころか、本以外のものが見当たらない部屋の中。一つの山が揺れたと思えば、ぴよこんと音を立てて薄桃色の頭が覗いた。

「うわっ!? ま、また変なところで読書をして！ ちゃんと椅子に座って読んで下さいって、いつも言ってるじゃないですか！」

「ごめんごめん。面白い本を見つけて、つい読みふけっちゃった」

バサバサと崩れた山をどかしながら、ウィリアムのお師匠様——と呼ぶには、ずいぶん若い人物が姿を現す。

ちよつとクセのある薄桃色の短い髪に、輝く金色の瞳。ローブというよりは、黒地のパーカーのような服に、着られている。彼は、まだあどけなさの残る少年だった。

目を丸くする一同を気にもせず、少年はぺこりと可愛らしく頭を下げる。

「ようこそ僕の城へ。会えて嬉しいよ救世主たち！ 僕の弟子と仲良くしてくれてありがとう！」  
「……救世主？」

突然出てきた妙な呼び名に、つい面食らってしまう。ゲームでなら「世界を救った」と言えるけど、今の私たちは『魔物討伐のための新設部隊』にすぎない。さすがに大げさだろう。

戸惑う私たちを置き去りにして、彼は本の山を跳び越えると、部屋の奥へと進んでいってしまう。応接間はこっちだよ。僕についてきてね！」

「ちよつと、お師匠様!? 最初からまともな部屋に通して下さいよ！」

「ふんすかと怒るウィリアムに、ふり返ることもない。うん、実にフリーダムだわ。」

「……ウィル君、君の師匠は変わった人だね」

「ぼくもそう思います。で、ですが、腕は確かなんですよ！」

呆れたように肩をすくめたダレンに、ウィリアムはフォローしようとして失敗している。ウィリアムを育てた人物だし、ゲームの攻略対象なら敵ではないと思うけど……うーむ。

まあ、この本まみれの部屋にいても仕方がない。再び顔を見合わせた私たちは、意を決して奥の部屋へと足を進めたのだった。

さて、誘導された奥の部屋に辿りついたのだけど、散らかり放題だった入り口と比べて、そこは見違えるほど整った空間になっていた。

派手さはないけど、壁や床などは落ち着いた茶色で統一されていて、本も壁際の一棚にきっちり

収められている。マホガニー製と思しき家具はどれもお洒落な形をしているし、何よりも清掃の行き届いた部屋は空気がきれいだ。

おかげで、用意されている紅茶の芳醇な香りと、隣に並ぶ焼き菓子の良い匂いが、心地よく鼻腔

をくすぐってくれている。

25 転生しました、脳筋聖女です2

……唯一問題があるとしたら、それを給仕しているのが『人外』であることだけだ。  
(何かしら、これ)

言うなれば、イラストとかでよく見るデフォルメされた『おばけ』だろうか。紙風船ぐらいの大  
きさの丸いフォルムに、ちょこんとのついている目と口。鼻は見当たらないけど、ずいぶん愛らしい  
顔だ。

……向こう側が半分透けて見えるのに、ちゃんとティーポットを持っているのが謎だわ。

「ウィリアムさん、これ何？」

「お師匠様の使い魔……みたいなものだと思います。わ、悪い子じゃないので大丈夫です！ いつ  
もお手伝いをしてくれてた子なので！」

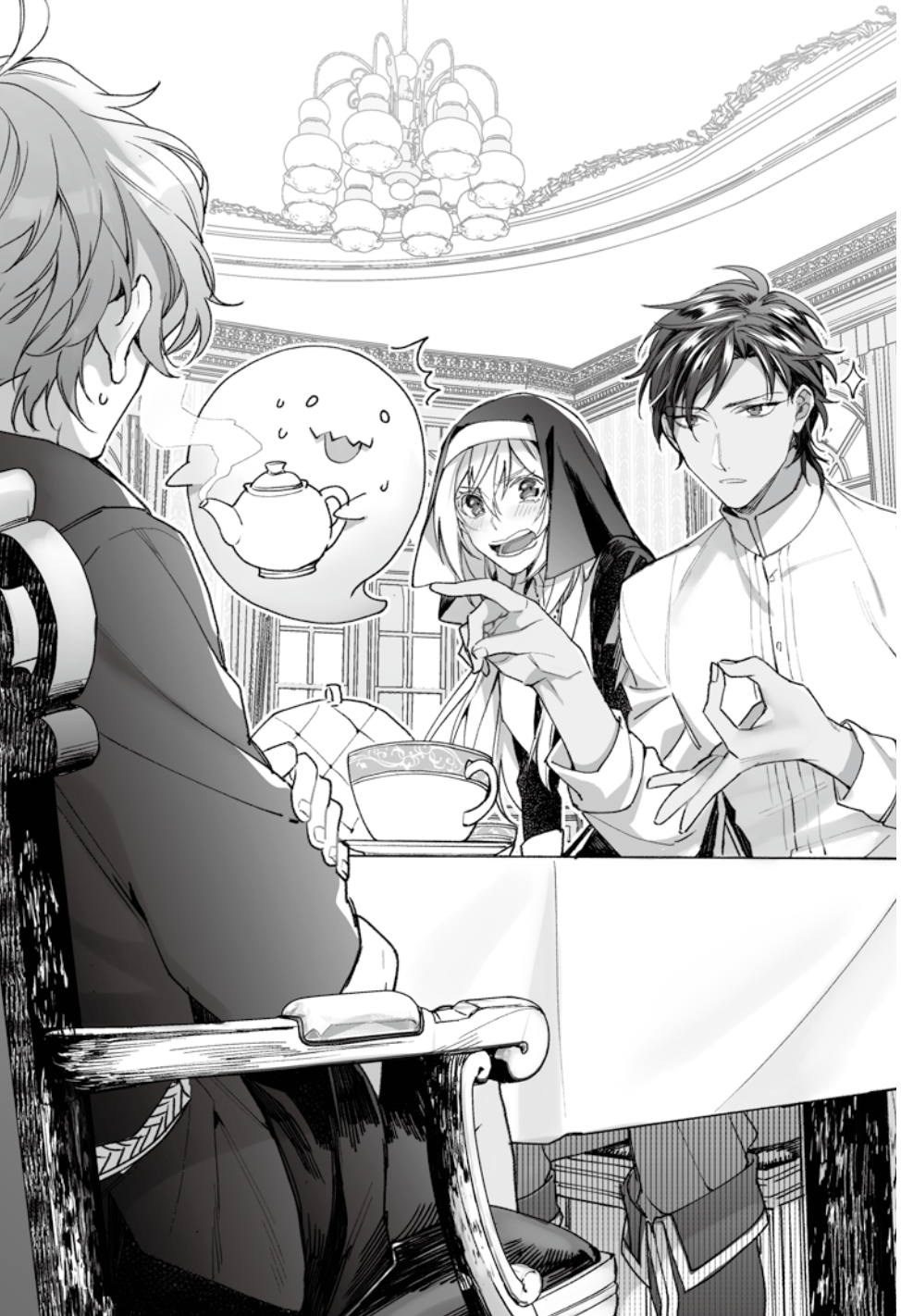
どうやら魔物や敵ではないらしい。私がまだ少し疑っている間にも、白いクロスクロスの敷かれたテー  
ブルに美味おいしそうな紅茶を並べてくれている。

やがて、全員の給仕を終えたおばけちゃん(仮)は、達成感あふれる笑顔で一息ついた。思わ  
ず頭を撫でてみたら、ちゃんと触さわれた上にきゅきゅと喜ばれてしまった。なにこれ可愛い。

「すみません、これはどこに売っていますか？ アンジェラが気に入ったみたいなので、買って帰  
りたいのですけど」

「やめてジュード、過保護なお父さんみたいなことするのやめて」

「ごめんね！ この子は売り物じゃないし、僕の生命線だからあげられないかな。僕、魔術は得意だ  
けど、生活力は全くないからね！」



真顔で阿呆な質問をしたジュードに、導師はくすくすと笑って答える。おぼけちゃんは私に手をふった後、導師のもとへ戻り、頭の上にもちよこんと乗った。やだ、これ本当に可愛い。

「くっ、僕に魔術の素養があれば！ ごめんね、アンジェラ」

「すみませんアンジェラさん。ぼくもこの使い魔は出せません……」

「ちよっと、過保護なお父さん増えるのやめてよ。私は何も言っていないじゃない！」

「アンジェラちゃん、そんな純粋な子どもみたいな顔をされたら、叶えてあげたくなくなるって。帰ったら賢者様に聞いてみようか？ あの人なら似たようなの出せるかも」

……過保護な父親はジュードだけじゃなかったらしい。何故かダレンまで真顔で提案してくるので、向かいに座る導師は大きな声をあげて笑い出した。くっ、本物の子どもに笑われるなんて！

「くっふふ……ごめんごめん。君たち面白いね。思っていたのとはずいぶん違うみたいだ」

「私のせいですか？ これ」

「愛でられるのは良いことだよ、聖女さま。さあ皆、遠慮なく召し上がれ」

なんとか笑いを堪えた彼は、皆にお茶とお菓子をすすめる。あの可愛い子が用意してくれたものだし、毒を疑わなくても大丈夫だろう。カップを手にとっても良い香りがするだけだ。

「今日は来てくれてありがとうございます。僕は導師カールハイイツ。といっても本当の名前じゃないけど、カールと呼んでね。ウィリアムがお世話になっているよ」

導師——改めカールハイイツ……いや、本人もいいと言ったしカールと呼ぼうか。

ゲームでは攻略対象の一人だったカールは、紅茶のカップを揺らしながら目礼で名乗った。本名

ではないとハッキリ言うあたりが彼らしい。……言うまでもないけど、彼は見た目通りの歳ではない。いわゆる合法シヨタというやつだ。

「ご丁寧ありがとうございます。私は……」

「自己紹介はいいよ。君たちの名前は知ってるし、だいたいの人となりもわかるつもりだ。もつと

も、僕が思っていた性格とは違うみたいだけだね」

礼儀として名乗り返そうと思ったのだけど、小さな手がそれを制する。

私たちのことを『知っている』という言葉に、情報担当のダレンがピクリと眉をひそめた。

「ああ、ごめん。悪い意味で探ったわけじゃないんだ。先見とか未来視とか、そう言えばわかりやす

いかな？ 僕は少しばかり先の未来を知っているんだ。そこに関わる君たちのこともね」

「——え？」

続いた言葉に、全員が固まってしまった。

先見、未来視……いわゆる予知系の能力だ。彼は超優秀な魔術師だし、そういうことができても

おかしくはないと思うけど。

「ちよっと待ってくれ。貴方は『思うところがある』という理由で、エルドレッド殿下の誘いを

断つたはずだ。それはつまり、オレたちの部隊の未来が見えたからってことか!?」

声を荒らげたダレンが、私の疑問を代弁してくれている。そう、未来が見えていたのなら、

なおさら、参加してくれなかったこと”が疑問になってくるのだ。

（彼はさつき私たちを『救世主』と呼んでいた。多分、いずれそうなるってことよね。普通に考え

て

て

て

て

て

れば名誉であるそれを、知っていて拒否したってこと？)

軋む音を立てたダレンの拳を、カール本人が「まあまあ」と宥める声が聞こえる。

私を知るゲームの彼と、外見はだいたい同じだ。予知系のスキルはなかったはずだけど、超有能な魔術師の彼なら誤差の範囲だと思う。……なら他には、どう変わったのだろうか。

「ごめん、変な誤解をさせてしまったね。僕は君たちのことを知っているつもりだったけど、実は最近、実際の君たちとの違いが大きくなってきてね。今日はそれを確かめたくて、ここに来てもらったんだよ」

弁明するカールの顔から、ようやく笑みが消えた。幼い顔立ちには不釣り合いなほど真剣な様子に、こちらの空気もまた強張っていく。

弟子のウィリアムも私たちと同じ反応なので、何も聞かされていないなかったのだろう。

「たとえばそうだね、名前や出身地、家族構成や王都へ来るまでの経緯はだいたい知っているよ。ウィリアムの才能も知ってて弟子にとつたし、他の人のこともそれなりに知っていると思う。ただね、わからなくなったのが、君だよ聖女さま。君は外見以外、僕が知ってる情報と全然違うんだ。だから今日、君とだけはどうしても話したかった」

「私……?」

語っていくカールの声は、先ほどよりもいくらか低くなっている。おかげで外見は少年なのに、大人と喋っているような錯覚を覚えた。まあ実際、私より年上なのだろうけど。

(私が情報と違うというのは、もしかして転生者だから? カールは脳筋じゃないアンジェラを予

知していたってこと?)

彼を見返すと、その金の目もまた、私をじっと見つめていた。外見は幼いのに、ずいぶんと老成した目つき。そこには何故か、こちらを糾弾するような色すら浮かんでいる。

「うーん、まどろっこしいなあ……もう単刀直入に聞いてしまおうか」

「な、何かしら」

頭上のおぼげちゃんをそつとテーブルに置いて、カールはこきこきと首や肩の関節を鳴らす。

やがて、一通りの関節を鳴らした彼は——別人のような鋭い瞳を向けてきた。

「アンジェラ・ローズヴェルト、『お前』は『誰』だ?」

「——は?」

尋問でもするかのような冷たい問いかけを合図に、私の周囲から「背景」が消えた。

ダレンもウィリアムも、隣にいたジュードすらもない。一瞬で消えてしまった。

「な、何これ……ここはどこ!?」

何も無い真っ白な空間の中、私とカールは二人きりで向かい合って座っている。

上を見ても下を見ても、一面の白。かろうじて椅子があるから、この辺りが床なのだろう、という見当はつけられるけど、ここから立ち上がりて歩こうとは思えない状況だ。

一通り周囲を確認してから正面に向き直れば、こちらを睨みつけている少年の姿。



——いや、彼はもう『少年』とは呼べない表情を浮かべている。どこかくたびれたようなそれは、大人の男の顔だ。

「……導師カールハイנטツ、これはどういうこと？」

なんとか強気な声を心がけて質問する。どうやったのかはわからないけど、多分ここはカールのテリトリード。心が負けてしまったら、何をされるかわからない。

「どういうことだと聞きたいのはこちらだ。お前は誰だ？ 本物のアンジェラをどこにやった？」

「本物も何も、私がアンジェラ・ローズヴェルトよ。それとも、同姓同名の別人を捜しているの？」  
「違う。俺はお前と同じ顔をした、聖女アンジェラについて聞いているんだよ」

淡々と告げる声は低く、外見の幼さとますますミスマッチだ。おまけに口調まで変わっているじゃないか。こつちのほうが素なのかしら？ ゲームの時は……ダメだ、思い出せない。

（口調は置いておくとして。私が偽者扱いされるって、どういうこと？）

「誰と間違えているのか知らないけど、エルドレッド殿下に呼ばれたアンジェラは私よ？」

「ふざけるな！ お前が『聖女』なわけがない。俺の知っているアンジェラは、前線に出て鈍器をふり回したりしねえよ！」

「あら、よく知ってるわね」

王都に着いてから人目のある場所ではまだ戦っていないのに、どこかで覗かれていたのかしら。

彼が味方ならともかく、敵なら皆にも伝えておかないといけないわね。

……この変な空間を無事に出了らたら、の話だけだ。

「お前は一体何を企んでいる？ おおかた、アンジェラに外見を似せただけの偽者だろう？ どここの組織の者だ」

「だから、私がアンジェラ本人だって言ってるじゃない！ なんで頭ごなしに偽者扱いされなきゃいけないわけ？」

「俺の知っているアンジェラと全く別人だからだよ！ 顔こそそっくりだが、言動は全く似ていないし『魂』も別人だ！」

魂？ 導師クラスの魔術師になると、そんなものまで見えるのかしら。

別人と言われても、気がついたら私はアンジェラだったわけだし、元の私との違いがあるとしたら前世の記憶を取り戻してしまったことだけだ。

もしかしたら、魂とやらが前世の私と混じってしまったのかもしれないけど、それで別人やら偽者やらと言われる筋合いはない。

「そんなことがわかるのなら、私が神様の加護を受けていることもわかるんじゃないの？」

「……チツ」

忌々しげに舌打ちしたカールは、私を再度睨みつけてから髪を掻き乱した。

適当に言っただけなんだけど、どうやら本当に神様の加護も見えるらしい。教会の偉い人にしか見えないと思っただけけど、言うだけ言ってみるものね。

その偉い人いわく、私ほどの加護持ちはなかなかないらしいし、神様が関わるものを偽装するのは不可能だ。それが目の前の彼にも見えたのなら、私がアンジェラだと信じてくれてもよさそう

なものだけだ。

「……確かに、お前の体はアンジェラのものだ。寵愛と呼ぶに相応しい神の加護がついている。だが、お前は俺の知っているアンジェラじゃない」

「強情ね。何を言われても、私がアンジェラなんだけだ」

……残念ながら、そう簡単には考えを変えないらしい。

他の仲間は普通に受け入れてくれたし、教会関係のトラブルがあつたとも思えない。なら、私の何が気に入らないのか。

よしんば、私の他に『アンジェラ』がいたとしても、騙って得をするようなことは何も無いはずだ。魂なんてものが見える人間が、そんなペテン師にひっかかるわけもないだろうし。

(彼は「ゲームの時のアンジェラ」を知っている……?)

色んな可能性を消していったところで、ふと、そんな考えが頭をよぎった。

私と彼は確実に初対面。しかし、私もまた、彼ではないカールハインツを知っている。

——まさかとは思う。だが、私自身という前例がいるのだから、可能性はゼロではない。

「……ねえ、聞いてもいい？ 私と貴方は初対面よね？ 何故貴方はアンジェラを知っているの？ それはさっき言っていた、先見とか予知とかで？」

「そうと言えそうだし、違うとも言える。確実なのは、俺はお前じゃないアンジェラを知っていることと、そちらが本物だという自信もあることだ」

恐る恐る問いかけてみれば、カールは自信満々に返してきた。

やはり、知っている。であり、会ったことがある。ではない。それなら、もしかして、

「ねえ、貴方。もしかして——『転生者』なの？」

「……………は？」

我ながら、ずいぶん硬い声になってしまった。

彼がもしあのゲームをやっていたのなら、私と同様の知識チートがあつてもおかしくはない。私が『神様の声』と言って誤魔化しているのと同じように、『未来視』と言っているだけかもしれない。

元プレイヤーなら、聖女らしいアンジェラを知っていても当然だ。脳筋な私を偽者と言いたくもなるだろう。

「……………」

私の真面目な問いかけに、カールが硬直すること数秒。

眉間に深く皺を刻んだ彼は、思い切り息を吐き出した。

「……転生つてのは、生まれ変わりのことだろう？ だったら『否』だ。俺は俺以外のものにはなっていないし、残念ながら『死』には縁がない」

「あ、あれ？ 違うのか……」

色々と覚悟をして聞いたのに、どうやら違うらしい。

そりゃまあ、そんなにホイホイ転生させていたら、世の中チートだらけになっちゃうだろうけど。

「転生者じゃないなら、貴方なんなの？ どこでその本物とやらを知ったわけ？」

「明確には答えられん。だが、俺にとつてお前が偽者なのは確かだ」

「私は本当にアンジェラよ！ ああもう、これじゃ堂々巡りね」

転生者じゃないとしたら、ますます謎だわ。彼は偽者扱いを撤回するつもりもないみたいだし、私にどうしろって言うのよ、もう！ 考えるのは苦手なのに！！

「ねえ導師カールハインツ、私が偽者だと言うのなら、証拠を見せなさいよ。もしくは、貴方が本物と言うアンジェラに会わせて。どちらもできないなら、証拠の言いがかりだわ」

「本物がどこにいるかわかるなら、今すぐにも助けに行っている！ アンジェラを隠しているのはお前なんだろう!？」

「……はあ？」

私は当然の要求をしただけなのに、カールは声を荒らげて怒り出した。

こいつ、私を偽者扱いするばかりか、誘拐犯か何かだと決めつけているの!? ……さすがにそろそろキレそうだわ。

「あの子、私がアンジェラを騙<sup>なだ</sup>って、得られる利益は何？ なんのためにそんなことしなきゃいけないの？ だいたい、なんで初対面の貴方にそんなこと言われなきゃいけないのよ。貴方はアンジェラの何？ まさか、恋人ですとも言うつもり？ どこからどう見ても子どもの貴方が？」

「ぐ……っ！」

やや早口で怒りの質問をぶつければ、カールはばつが悪そうな表情で身を引いた。

確かゲームでは不老不死っぽい長寿設定のキャラだった気がするけど、人生経験が豊富なようにはとも感じられない。ここまで悪い方向に変わっていると、ガツカリね。

「違う、そんなつもりじゃ………ああ、くそっ！ 俺は何をやっているんだ……」

「何よ、言いたいことがあるなら言いなさいな。現実は何も変わらないけどね」

さらに追及すれば、カールは頭をガシガシと掻いて、ふり乱す。

そして次の瞬間には後ろを向き、椅子の背に思い切り頭をぶつけ始めた。……ご乱心？

「先に言っておくけど、自傷は治療しないわよ、私」

「わかっている。……はあ、お前の言う通りだ。頭ごなしに否定するのは失礼だったな。自分で思っているよりも、俺は『彼女』に肩入れしていたらしい………情けない話だ」

（あくまで彼女、なのね）

彼は頭をぶつけたことで、一応落ち着きを取り戻したようだ。再び向けられた顔は、『導師』の名に相応しい理知的なもの。おでこの辺りは真っ赤だけど、ツッコむのも野暮だろう。

「俺が知っているアンジェラは、お前とは別人だ。……でも、お前も偽者ではないのだな？」

「当たり前でしょう。私はアンジェラ・ローズヴェルトとしてこれまで生きてきたもの。たとえ貴方が予知した姿と違ってても、私は偽者じゃないわ」

「そうか………そうなんだろうな」

ゆつくりと目を閉じて、カールは真つ白な天井を仰ぐ。パーツこそ幼いけれど、その横顔はどこかくたびれていて、何かを堪えているようにも見える。

彼はそのまま、両手で目を覆ってしまった。隠された表情は、もう見えない。  
(よくわからないけど、誤解は解けたのかしら)

用が済んだなら、早く元の部屋に戻して欲しい。視界が白すぎて、そろそろ目が痛いわ。

「……………アンジェラは、ここにはいないんだな」

待つこと数分。ようやく顔の角度を戻したカールは、少年らしい表情を取り繕って笑った。

「……………すまなかった」

「わかってくれたならいいわよ。余計なお世話だろうけど、悪魔崇拝はやめたほうがいいわよ。その『本物のアンジェラ』とやらも、変な信仰の産物なんじゃないの?」

「悪魔崇拝? ……この部屋の扉のことを言っているなら、あれは人を寄せつけないためのものだ。俺の信仰でも趣味でもないぞ」

「あ、そうなの? 貴方の趣味だと思っていたわ」

てっきり変なものを崇拝しているから、先見という名の妄想でもしたのかと思った。私の容姿から考えれば、ゲームの時の聖女様のほうが『合う』だろうしね。

「ウィルから聞いてないか? 俺はここで禁書類の管理をしている。それこそ、悪魔だなんだを扱う危険な書物をな」

なるほど、それは確かに人を遠ざけるべきだ。ただ、あんなあからさまな彫刻つきの扉では、本

物の狂信者を引き寄せてしまいそうな気がするけどね。

「正気なら何よりだわ。で、話は終わったのでしょうか? そろそろ皆のところへ返してくれない?

この部屋、目が痛いんだけど」

「そうしたいのは山々だが、この魔術は解くのに時間がある。少し待て」

「……………なるべく早く頼むわ」

魔術には詳しくないけど、解けるまではここから出られないらしい。また喧嘩になっても嫌だし、大人しく待つしかないようだ。私のことを認めたってわけでもなさそうだしね。

(静かで、真つ白で、なんだか雪山で遭難してみたみたいな気分)

目を閉じてもぼんやりと白く、耳には何も聞こえてこない。ここはなんだか寂しいところだ。

(早く、皆のところへ戻りたいな)

ダレンやウィリアムとはまだ二日しか一緒にいないけど、もう仲間意識が芽生えていた。その傍には、誰よりも信用できるジュードがいる。きつと今も、私を心配してくれているだろう。

「アンジェラ」

そう。こういう背筋に響くような、心地よい声で

「……………ん!? 今ジュードの声がしなかった!?!」

幻聴かと慌てて目を開けば、頬に触れたのはほんの少し硬い温もり。

次の瞬間、慣れ親しんだ長い腕が、白い世界を壊すように私を抱き締めた。

「アンジェラ!!」

「ジュード……？」

「遅くなってごめん。怪我はしていない？ 大丈夫？」

鍛えられた筋肉質な体は硬いけれど、ここは柔らかな布団よりもずっと安心できる場所だ。

その温もりを、私は誰よりも知っている。頭上からふってくる低音と、髪を撫でる無骨な指先に、なんだか涙が出そうになった。

(……ああ、本当にジュードだ)

チート転生者なんていっても、結局私もただの人間だ。よく知らない相手と二人きりの妙な空間——それも、いきなり偽者だなんだと言われて、実は結構参っていたらしい。

彼の匂いをめいっぱい吸い込んで、ぎゅうと体を押しつける。……安堵が体中に染み渡っていく。(ジュードが来てくれたなら、もう大丈夫だわ)

人間、窮地に陥ると本質が見えるっていうのは本当みたいね。自分がこんなに彼に依存しているなんて知らなかった。

「アンジェラ？ 泣いているの？ どこか痛む？」

「……泣かないわよ。ジュードが来てくれたから、もう平気」

「役得だな」なんて軽い声を聞きながら、彼の胸に強く顔をこすりつける。

こんなところで泣くものか。ジュードがいてくれるなら、私は戦える。ゲームの時のか弱い聖女とは違うもの！

「……………ジュード・オルグレン。なんでお前がここに」

ゆっくりと顔を上げれば、目を見開くカールの姿がある。少年らしからぬ動揺と困惑の色を浮かべる彼は、もう最初のような幼さを演じるつもりはないようだ。

突然現れたジュードに対して、心から驚いているように見える。

そうだ、ここは導師たる超有能な魔術師が作り出した空間。迎えに来てくれたことは嬉しいけど、魔術の素養ゼロのジュードがどうやってここへ来たのだろう。

「ジュード、貴方どうやってここに？」

恐る恐る幼馴染を見上げれば、彼は私を安心させるように微笑んでから、ぽんと頭を撫でてくれる。感触もすっかりあるし、幻や偽者ではなさそうだけど。

その答えは、意外とあっさり告げられた。

「導師カールハイנטツ。貴方の弟子は、貴方が思っているよりもずっと優秀ですよ」

「ッ！ そうか、ウイルが！ ははっ、やるじゃないか！」

あの気弱な青年は、私たちが思う以上に優秀だったらしい。……いや、それよりも、己の師に背いてまで私を案じてくれたことを喜ぶべきかしらね。

カールももう何かするつもりはないようだ。素直に弟子の成長を喜び、手を叩いている。

……私を偽者と糾弾した時の険しさは、もうない。

「ウイルはもう俺の術に干渉できるほどになったんだな。俺の負けだ、ひと思いに壊すといい！」満足そうに笑ったカールは、すっと両手を広げた。

「では、遠慮なく」

ジュードが右足を上げて——真っ白な「壁」を、思い切り蹴飛ばす。

「アンジェラさん!!」

「アンジェラちゃん、無事か!？」

今の一瞬で何が起こったのか。それを私が理解するよりも早く、私を呼ぶ二人の声が耳に届く。  
「……………えっ!? あ、あれ?」

慌てて視線を巡らせば、そこはおぼけちゃんが紅茶とお菓子を用意してくれたあの部屋だった。  
分厚い魔術書を手にしたウィリアムと、双剣を片方だけ抜いたダレンが、心配そうな表情でこちらを見ている。……………戻って、きた?

「もう大丈夫だよ、アンジェラ」

頭上からは、私を腕に抱いたままのジュードの声。あの真っ白な世界から出られた、らしい。

「おっと、気をつけて」

思わず力が抜けてしまつて、ジュードに腰を支えられる。

「……………ごめん。安心したら、気が抜けちゃった」

別に攻撃されたわけでもないけど、ひどく疲れたし……………やつぱり、怖かった。

相手はゲームの攻略対象——味方だと思っていた人物だから、なおさらかもしれない。

「大丈夫か、アンジェラちゃん。怪我はないんだよね?」

「お師匠様がすみませんでした! 無事で本当によかった」

二人が私のところへ駆け寄ってくれる。その表情は私を案じてくれており、同時に安堵しているようにも見える。やつぱり信頼できる仲間というのはいいものね。

——一方、仲間にならなかった彼は、テプルの向かい側で一人身をよじっていた。

「あいつたたたたた……………いやあ、俺も歳だなあ……………」

恐らく魔術を「無理矢理破られた」せいだろう。顔色は青く、小さな額には汗が浮かんでいる。

彼の声に反応したダレンが、剣の刃をすつとそちらへ向けた。

「ああ、警戒しなくてもいい。何かするつもりはないし、今はさすがに何もできない。無理矢理解かれると、結構くるんだよ。……………成長したなウィル」

「ウィル? お、お師匠様、口調が……………」

まだ苦しそうにしながらも、カールはひらひらと手をふつて応える。ウィリアムが違ふところに驚いているけれど、とりあえずそれは置いておこう。

「……………私のことは、もういいのね?」

「よくはないし、お前を認めたわけでもない。だが、俺はお前たちの敵ではないからな。……………今日はやり方も悪かった。俺の負けだ」

ジュードを盾にして訊ねてみれば、少し悔しそうにしながらも、カールは笑った。それも、『私たちの敵ではない』とハッキリ口にして。どういう魂胆にしろ、その一言をもらえただけでも助かったわ。

ほっと胸を撫で下ろせば、仲間の三人も同じように息を吐いた。魔術師の最高峰である導師と対

峙するのには、さすがに皆緊張していたみたいだ。ウイリアムなんて自分の師匠だしね。

ダレンが剣を取めたところで、カールもぐつと背筋を伸ばす。長身で筋肉質なジュードと比べれば、折れそうなほど細くて小さい体だ。……こんな子どもに捕まったなんて、悔しい話だわ。

「……お師匠様、今日はもう下がらせてもらいます。ぼくたちの仲間を突然さらったこと、エルドレッド殿下に報告しますから」

「そうしてくれ。俺も覚悟の上で魔術を使ったからな。予定とは違ったが、お前の成長が見られて嬉しかったよ。これから大変な戦いになるだろうが、気をつけてな」

堂々と宣言したウイリアムに、カールは師匠らしい言葉を返す。外見は幼くても、やはり彼はウイリアムにとって『ちゃんとした師匠』だったようだ。

「っ！ し、失礼します！」

ウイリアムは少しだけ口ごもると、足早に部屋を出て行ってしまった。その様子にダレンは肩をすくめてから、彼の後を追っていく。

今日の件については、ダレンからも王子様に報告してくれるだろう。カールをどうするかは、偉い人の判断待ちだ。

私とジュードも、このまま帰らせてもらおう。腹立たい気分は一応落ち着いたけれど、仲間になつてくれないのなら、もう会いたい相手でもないしね。

「……ジュード・オルグレン」

帰ろうとしたら、カールのほうが何故か呼び止めた。それも、相手はジュードだ。

「……………」

足を止めたジュードが、ほんの少しだけ彼をふり返る。私に向ける穏やかな笑顔とは違い、顔立ちのままの鋭い目つきで彼を睨みつけている。

「お前は、俺と同じ」だと思ったが、違うんだな。『そのアンジェラ』でいいのか？」

「…………ツ！ ちよつと!!」

何を言うかと思えば、この男はジュードにまで私が偽者だとアピールするつもりなのか。これまでずっと、この大事な幼馴染と一緒に育ってきたアンジェラは私なのに！

「私は偽者じゃないって言ってるじゃない！ いい加減にしなさいよ！」

「大丈夫だよ、アンジェラ」

反論しようと声を上げたけれど、ジュードが私を止めた。

「大丈夫。君が怒る必要はないよ」

ぐつと声を呑み込んで見上げれば、そこにあるのはいつもの幼馴染の顔だ。穏やかな微笑みに、つい毒気を抜かれて何も言えなくなる。

髪を撫でてくれる手も温かくて、まるで『心配いらぬ』と伝えているかのようだ。

「……貴方がアンジェラをどう思っているかは知りませんが、興味もありませんけどね」

私の髪を撫でながら、ジュードはカールの質問に答えていく。静かで穏やかなのに、何故か耳の奥にまで届くような声だ。

カールも、部屋の外に出ていたダレンたちも、黙ってその声に耳をすましている。

——まるでその答えが、とても重要な決断であるかのように。

『私』の『お嬢様』はもういない。そして、『僕』の『アンジェラ』は彼女だけだ。彼女に害をなすのなら、僕は神でも殺してみせる」

「———そうか」

わずかに間を置いて、カールが頷いた。

ジュードはもうふり返らずに、私の肩を抱き寄せて進んでいく。その歩みに迷いはなく、抱く手はしっかりと力強い。

やがて、あの悪趣味な悪魔柄の扉をくぐったところで、小さな啖きが聞こえた気がした。

「……囚われているのは、俺のほうか」と。

\* \* \*

「お師匠様が、本つつつつ当に！ 申し訳ございませんでした!!」

清々しく晴れ渡る空の下。絶妙な日陰に設えらえたテラス席にて、もう何度目かわからないウィリアムの謝罪の声が響く。さつき見直したばかりだけど、やっぱり面倒な性格なのは変わらなかつたようだ。

——さて、導師カールハインツの部屋を脱した私たち四人は、ただいまお洒落なレストランで遅い昼食をとっております。

せっかく王都の街へ出たのに、何もせずに城へ戻るのも癪だと言ってみたら、ダレンがお高そうなのこの店へ案内してくれたのだ。

外装は白を基調とした貴族の別荘のような造り。しかしデザインに堅苦しさはなく、壁のほとんどを大きなガラス窓にしてあるため風通しもよい。全体的に爽やかな印象のお店だ。

さつきまでいたのが古い図書館だったから、なおさらそう感じるのかもしれない。

若い女性のお客さんが多く、とりわけこのテラス席は、ほとんどが女性客でにぎわっている。ちらちらとジュードを見ているのも年頃の女の子たちだ。うむ、存分に目の保養をするといいわ。

ちなみに、メニューまでお洒落だったので、注文は全てダレンに丸投げした。聞いたこともない料理ばかりだったからね。……戦場で生きてきた私に、女子力を期待しないで欲しい。

「うう……ぼくがお願いして来てもらったのに、こんなことになるなんて……」

「いや、もういいよウィリアムさん。貴方はなんにも悪くないんだからさ」

「ウィル君、アンジェラちゃんもこう言ってるんだから、もう気にしなくていいって」

さすがに何度も同じ謝罪をされているので、ダレンも呆れた様子だ。何かの薄切り肉をフォークでつつきながら、ため息交じりにウィリアムを窺っている。

ウィリアムの前にもいくつか皿が並んでいるけれど、まだ手付かずのようだ。

「アンジェラ、これ美味しいよ」



一方、ジュードにいたつてはもうほとんど無視して、食事に集中している。テリーヌ又っぽい色鮮やかな料理を切り分けると、私の取り皿にも置いてくれた。ウィリアムも、これぐらい凶太くなくなってしまえば楽だろうにね。

「ウィリアムさん、謝罪はいいから食べよう？ それとも、嫌いなものでもあるの？」

「い、いえ、そうではありませんが……ぼくには皆さんと一緒に食事をする権利なんて……」

「食べないなら口に突っ込むわよ。はい、あーん」

「あむ………アンジェラさんッ!？」

いよいよ面倒になつてきたので、手近なペンネをフォークで差し出してみたら、素直にぱくつとしてくれた。ウィリアムもお腹は減つていたみたいね。

つまらないことを気にするぐらいなら、しっかり食べてくれたほうがずっといいのに。戦う人間は、体が資本なのだから。

「ずるい……アンジェラ、僕にもやつてくれない？ ほら、助けに行つたご褒美<sup>ほうび</sup>でことごと！」

「はい、どうぞ。なんなら口移しでもしましょうか？」

「君たち、それは二人きりの時にやつてくれな!？」

私の冗談に目を輝かせたジュードを、ダレンが慌てて引き止めてくれる。

ちよつとトラブルはあつたけれど、皆意外と元気そうで何よりだわ。

さて、ひとまず無事に食事をとり、人心地<sup>こころいしひ</sup>つくことができた。

食後のコーヒーとデザートが運ばれてきたタイミングで、のんびりしていたダレンが真剣な表情を作つて問いかけてくる。

「それで、誘拐されていた間、アンジェラちゃんはあの導師さんと戦っていたのか？」

「誘拐つて……別に戦つてませんよ。口喧嘩<sup>くちげんか</sup>をしてただけです」

どうやらあの白い空間へ行つている間、私とカールは椅子ごと消えた形になつていたらしい。

それが『異空間へ連れ去る魔術』だと気付いたウィリアムが、すぐさまそこへ干渉する魔術を發動。ダレンは詠唱中の護衛として残り、ジュードは私を助けに空間の中へ突っ込んできた、というのが彼ら側の顛末<sup>てんまつ</sup>だそうだ。

「口喧嘩<sup>くちげんか</sup>? それはまた……君は大人しい外見の割に、結構元氣だよな」

「むしろ、私が大人しいのは外見だけです。中身は自他ともに認める戦闘脳ですし」

「あー……確かにな」

昨日の戦いを思い出したのであるうダレンは、言葉を濁<sup>にご</sup>して頭を掻<sup>か</sup>く。戦闘脳も脳筋も私にとつては褒め言葉だから、いくらでも言つてくれていいんだけどね。

「しかし、君たちに喧嘩<sup>けんか</sup>をするようなネタあつたか? 今日が初対面だと思つたんだが。まさか彼は本当に悪魔崇拜<sup>あくますうはい</sup>者で、宗教的な違いから喧嘩<sup>けんか</sup>になつたとか?」

「そういう話なら聞き流せたんですけどね。初対面なのに、いきなり『偽者』と言われまして」「……なんだそりゃ?」

ダレンの驚く声に合わせて、ウィリアムも「ええっ!？」と肩を震わせる。コーヒーをすすつてい

たジュードも、静かに目を細めた。

「私にもよくわからないんですけどね。どうもあの人が、どこから私を監視していたみたいです」  
そのまま、カールに言われたことを簡単に説明してみる。

彼がメイスをふり回さない『別のアンジェラ』を知っていて、そちらが本物だと思っ  
ていること。私は彼女をどこかへ誘拐し、なり代わった偽者だと思われること。

魂がどうかという話は割愛したけど、それ以外は粗方まとめてみた。……思い返すとムカつ  
いてくるから、早いとこ忘れてしまいたいわ。

「……又聞きのおれが言うのもなんですけどさ。ウィル君のお師匠さん、頭大丈夫か？」  
「や、やっぱりそういう意見になりますよね……」

できるだけ客観的に話したつもりだけど、ダレンとウィリアムは呆れた表情で首を横にふつ  
ている。彼らは私の味方をしてくれるようだ。……少しホッとしたわ。

「オレは予知とかそういうのに詳しくないけど、自分が見た未来と違うから偽者だなんて、あま  
りにも極端すぎるだろう。そりゃ『女騎士』って言われて出てきたのがディアナ姐さんとか、そこま  
での差ならさすがにビビるけど」

「ダレンさん、私の女神様を貶すような発言は、宣戦布告とみなしますが？」  
「貶してない！ 貶してないから!!」

ダレンがディアナ様を引き合いに出すものだから、うっかりフォークをケーキに思い切り突き刺  
してしまったわ。

そりゃ女騎士と言われて、今のディアナ様をすぐに想像するのは難しいだろうけどさ。あんなに  
も雄々しい筋肉の女神様が現れるなんて、宝くじ一等ぐらいの奇跡だものね！

「そ、そうですね……ほくも『癒しの聖女様』と聞いていたアンジェラさんが、鋼鉄メイスをふ  
り回す勇者だとは思いませんでした。だからといって、否定したり偽者だと思ったりするよう  
なことはないです。予想と違うことなんて、世の中沢山あるじゃないですか」

ウィリアムが、私のほうをまっすぐに見ながら力説してくれている。

彼本人もまた、長身できれいな顔立ちなのに、中身は謝り癖のある残念男子だしね。この部隊の  
中だと、ジュードも外見とのギャップが激しいだろう。

何せキツめの顔立ちの色気担当イケメンなのに、話し方は穏やかな僕口調。そのくせ、剣を持  
たせれば殺戮兵器。「属性統一しろよ！」とツッコみたくなるのは私だけじゃないはずだ。むしろ、  
私よりもよほどギャップの宝庫じゃない、こいつ。

ダレンは……外見通りなので割愛しよう。軽そうな外見のキャラに限って苦勞人属性を持つてい  
るのは、乙女ゲームあるあるだ。

いづれにしても、自分の予想と違うからといって、偽者扱いするのはやはり極端だということだ。  
カールが正気を失つてると断言はできないけど、それでも私が糾弾されるのはおかしい、というの  
が二人の共通見解らしい。

(やっぱり私は反論しても良かったのよね。いや、ダメって言われてもするけどさ)

そうよ、外見に似合わない戦い方をしたっていいじゃない。そのことでよそ様に迷惑をかけてい